

1 今日の幸福 小太刀美恵子

尼崎JR脱線事故などを見れば、私たちの今日の幸福が明日の幸福につながらないのではという恐怖と不安に襲われます。家族や仲間が労わりあって生きていくことが幸せの最低条件ですが、それだけでは幸せは保てないのが現代社会です。他の人も幸せでなければ自分も幸せにはなれないということだと思います。現代社会の幸福の意味のほりさげを期待します。作品としてみると、言葉がやせています。ふくらみのためには「比喩」という言葉の栄養を取りこんでください。

2 いのちの絆 黒川フミ

詩友会に出した作品と、他に応募や投稿した作品をいくつか読ませていただきました。「長い長い前のこと(ハコちゃん)」「しあわせの種」「七十三歳のつづやき」やこの作品など、自分のテーマ領域をしっかりとって書き込んでいます。失礼な言い方になるかもしれませんが、「油がのってきている」とみました。さらに言葉を磨き広がりと深みに至ることを期待します。人生そのものが詩であったような時代性を生きた証言に期待します。

この詩では、ふるさとに残るいのちの絆が「働くことの魂」に収斂されていますが、「生めよ増やせよ」の政策には逆らえなかったふるさとの絆、戦病者となって帰還した父に対して「逃亡兵」とののしったふるさとの近隣の人たちの絆は、どうしてしまったのでしょうか。この忌まわしいふるさとも、黒川さんのいのちの絆のはずです。この辺を掘り込んでいくと、現代社会の人とコミュニティ問題の病に突き当たります。わたしは其処にことばの光をあてていくような詩を望んでいます。

3 歌う信号機 小太刀悦子

小太刀さんの見てきた、線路・電車・信号機・遮断機などの鉄道施設・設備は愛嬌があり、それぞれが誇りを持ち、闇の中でも光り、歌いだすものかもしれませんが、今日のそれは小太刀さんの「願い」なのではないでしょうか。尼崎の事故を見れば、不気味なおそろしさのシンボルです。したがって素朴で人のいい感性だけで擬人化していることを私は評価できません。人もシステムも非人間性そのものになっています。効率のえさになって食いちぎられてしまっています。其処をしっかりと見てください。

詩作の手法には構成する力の志向性が見られますので素材に対する冷徹な眼を求めたいものです。戦前・戦中に四季派という詩人たちの集まりと活動がありました。「戦争

の中に自然を見、抒情を歌った」と戦後批判的に評価替えされましたが、それでも基調底音にはアイロニーやニヒリズムが漂っていました。

4 丘 塩入佳子

まだ2～3の作品しか見ていませんが、これからの展開が楽しみです。基礎的な言語力を感じます。この詩では、なぜ「丘」であって「湖」ではなかったのか疑問が残りました。「湖が縮緬じわに光っている、微笑んで別れた、湖の青さと丘の蒼さがあらそった、それきり」など気配りがいいと思いました。

全体の印象は、淡く甘味なノスタルジーが漂っていますが、ただそれだけのような物足りなさの泡を残して、それもすぐに消えてしまいます。言葉の切れが弱いのは、少しおすまししておきたかったからでしょうか。

5 水車小屋 垢すり 小林まもる

自作詩のため省略。皆さんからのご批評をお願いします。

6 雪のある風景 岡嶋保之

「秋の夕暮れ」「老いた母」に続き、今回の作品ですが、秋の夕暮れと同じ表現手法です。岡嶋さんの自然は人が出てくることで生き生きと描かれるのではと思います。ようは人が自然を意味有らしめるのですが、己の中の「私」だけですと、言葉が意味の伝達に性急になってしまい、空回りしてやせ細ってしまいます。

三好達治の「測量船」の中の二行詩「雪」を、鑑賞してみてください。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

7 四月 武田裕也

この素材においても、これまでの一貫したテーマで書かれています。童謡詞に「さくら」を書いていますのであわせてみてはどうでしょうか。日記的な自己表出ばかりでなく、構成しようとする外部的な意識が強まると思います。

四月 肩に舞うさくらの花びら
この道に 叫びは打たれ舞い散り
底なし沼に 小さな未来を埋めていく
何もみるな なにも聞くな
ささやく声に捕らわれ
畦道へ這い上がることさえできない
季節は高まる鼓動のように過ぎゆくのに
己が影に足を縛られ
縄を解く呪文のような手だても知れず
ああ 若いとは捨てていくことが
見えざる手よ
時が刻むズキンという感覚にも
ぼくは随分慣れてしまった (編詩 小林)

8 祝福の朝 伊藤賢治

随分構成された詩編になりました。可能性が開けてきたようです。妻・夫・わたし・ボク・あの人・主イエス様などの主語が章ごとに変わっていて、読み応えがあります。教義上の言葉やアフォリズム(箴言・格言)については、註などが付記されるといいと思います。

私見ですが、詩として書くなら、「キリスト教」としてよりも「宗教の次元」でとらえて、自己の信仰や思想を表現したほうがいいのではと思います。賢治の童話は、仏教の原典、法華経の源流となったインドなどの民話・伝説などに基づいているといわれます。

*** 資料 野村喜和夫 詩の森文庫「現代詩作マニュアル」より